Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-08-02

中国における屏風絵の研究

王，元林

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2007-09-25
(Date of Publication)
2012-05-16
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4114
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004114

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏　　名	王　元　林
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学　位　記　番　号	博い第 21 号
学位授与の　要　件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の　日　付	平成 19 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

中国における屏風絵の研究

審　査　委　員

主　査　　教　授　百橋　明穂
　　教　授　森　　紀子
　　准教授　宮下　規久朗

屏風は中国の春秋戦国時代より発生し、二千余年、中国の文化と、永い歳月の間に洗練され、装飾と実用を兼ね備えた調度品として愛用されてきた。風よけ、目隠し、間仕切りなど多様な機能を備える他、美術鑑賞の対象として、数多くの名画がそこに残されている。

屏風絵は古代東アジアで最も流行した大画面形式の一つであり、中国では、絵画史を考察する上で重要な一分野であり、それなりの成果が得られたものと考えている。序章ではまず中国における屏風絵の先行研究と史料との関連について著者の考えを簡単に述べ、本稿の課題を明示したのち、主要な資料について、その性格を検討した。各章では、先行研究の成果も引用し、それを再構成し、若干の考察を幾分加味し、東アジアにおける屏風絵の関係も付言した。

中国における屏風絵の研究の資料は大体以下の五つの種類であり、それは絵画史、伝記など古文献典籍の屏風絵に関する様々な記載であり、墳墓中の屏風絵、もう一つは石窟、寺院壁画の屏風絵、様々な画跡の伝世品の屏風絵、磁器、木彫などに表現された屏風絵である。これらの資料群中、古い文献史料をとくに重視した。これは絵画史学の研究を進めていく上で、必要不可欠の条件である。

以上の様々な屏風絵の原始的な資料を蒐集して、実証、比較、帰納、分類などの研究方法を活用して、時代発展序列に立脚しながら、中国屏風絵の使用の歴史、表現の形式などを考察して、特に中国屏風絵の各時代における表現特徴と芸術風格を検討した。さらに、屏風絵の装飾意味及び中国古代絵画史における位置を探求した。また屏風絵における伝統的な中国絵画の山水画、花鳥画、人物画といった画題の発展面目の帰納についても考察した。

本稿は、中国における屏風絵の歴史を貫く特質を念頭に入れつつ、屏風画芸術がいかに形成され、また変化したかを歴史的に辿ったものである。図像学的な視点を導入することにより史的変遷の相において屏風絵美術を把握し、それに関連文献史料を加えて屏風絵の中国における様相を明らかにする。そしてそれを軸に、屏風絵芸術が中国大陸から朝鮮半島を経て、日本列島へ伝播する際の変容の様相も構造的に解明しようと試みた。それには具体的に以下の方法をとった。即ち十九世紀以前の中国と朝鮮半島、日本列島の屏風絵に関する文献史料、美術作品、画像資料を出来る限り網羅的に蒐集して、それらを関連する伝世作品や出土品などと照合させて細部にわたって図像を読み解く。他の作品の図像との相違、共通点や組合せを考慮して図像の構成について考察する。図像要素および図像構成を成り立たせている時代性と地方性を調べることによって、漢時代から明清時代にかけて引き継がれた屏風絵の伝統と変遷の様相を解明する。

本稿は大きく三部に分けられる。即ち第一部の序章、第二部の第一章から第八章までの論考、第三部の終章から構成されている。第一部では中国における屏風絵研究の現状について、第二部では中国における屏風絵の軌跡について、そして第三部では本稿の結論として中国及び東アジアの屏風絵の特質についてそれぞれまとめた。

次に各章の要旨を述べていく。

序章において中国における屏風絵研究の現状の問題及び本稿の論点などについてまとめた。具体的には、屏風絵の問題に関する先行研究史の概要、研究上の制約、本稿の資料典拠、研究方法、論点などについてである。

第一章「屏風の歴史についての考察」では、文献史料を引用し、中国における屏風の定義と性格、種類、機能および出現と変遷の歴史について検討した。

第二章「屏風絵についての展開」において、中国における屏風絵の定義と性格、材質技法、種類と画題、図像構成、機能、発生・発展の歴史について検討した。

第三章「屏風絵の発生と形成期—漢時代及び漢以前」では、戦国から漢にかけての時代の屏風絵の特徴及び図像形成について詳しく検討した。文献史料を重視しながら画像石・画像磚、崖墓の彫刻、壁画上の図像について考察し、最終的には中国における早期の屏風絵の様相を明確にすることを目的とした。

この時期の壁画に出現した屏風絵の特徴としては、画面の局部に人物の背景家具として描かれた、基本的に素面である、曲折式の坐榻の囲屏が多い、ということが挙げられる。

第四章「屏風絵の発展期—魏晋南北朝時代」において、魏晋南北朝期（二二〇～五八一）の史書、画史画論、題画詩などの文献史料における屏風絵についての物語や伝世作品などに注目し、木漆器屏風、石榻囲屏、壁画などについて考察した。とくに、この時期の出土品を代表する屏風絵としてソグド人石榻囲屏と崔芬墓の屏風絵をめぐって詳細に論じた。

魏晋南北朝時代の屏風絵は前半では漢代の主題と様式を継承しつつ発展させ、後半では様々な画風を新たに生み出して来る隋唐の造形表現の祖型となった。南北朝時期の壁画墓屏風図の特徴は前代に比べて人物の背景として拡大され、壁一面に描かれる主体背景となり、墓室壁画の中心となる明瞭な変化を遂げた点にある。また主な画題として山水画がしだいに発展して独立した画題となった。これは隋唐時代の屏風絵にきわめて大きな影響を与えた。他に北から南下し南北朝の統一を成し遂げた騎馬遊牧民の鮮卑族や、中央アジアから東アジアに至る交易網を作りあげて東西文明の交流の主役を演じたイラン系ソグド人の姿も描かれた。

第五章「屏風絵の繁栄期—隋唐時代」では、隋唐期における屏風絵の歴史的・地域的な変遷について考察した。

この時期の史書、画史画論中の記述、画讃・題画詩・論画詩・画題・画跋・画記などから屏風絵に描かれる物語や屏風絵の歴史上の様相を理解することは比較的容易である。それに加えて、絹画屏風、紙画屏風、石棺床囲屏などの屏風作品、古墳壁画、石窟壁画などの画像資料を

もとに検証した。とくに唐墓壁画屏風図の豊富な画題、内容は重要な資料となり、更にそのことは隋唐期における屏風絵の特徴の一つといえる。またこの時期の屏風の使用は一般化し、宮廷、官府の他に個人宅にまで設置された。名称も多様化され「屏」、「障」、「障子」と称され、漢詩、書、絵画などが共に表されるようにもなった。これによって屏風は家具としての機能だけでなく、当時の詩人や画家、書家による芸術の表現対象としての機能も有し、それが屏風の機能として最も重視された。

第六章「宋・遼・金・西夏・元時代の屏風絵」において、中晩唐時期の屏風絵の遺風に注目すると同時に、この時代の新画題と新技法などを捕捉し、遼・金・元時期における屏風絵の民族性についても考察した。この時代に入って、花鳥画と水墨山水図が躍進していて、没骨法という新しい技法も発展した。ことに五代から宋時代にかけて絵画空間に多様な展開をみせる二重空間の構築は、画中画としての屏風と衝立の小景画を通して、その時代性を強く示す。また、墓葬からの壁画屏風には、龍文、水波文など古い画題が再び出現し、伝世品絵画には、画中画としての屏風絵がよく見られる。絵画の空間構成と造形理念を共有しつつ、人物画の背景として山水図屏風を配することは、はるか明・清時代の人物画にまで通じる手法である。なお、屏風絵の文化的意味は、伝統的な神秘性と勧戒性から、現実性と吉祥性へ転換する。

第七章「明清時代の屏風絵」では、中国における屏風絵の変容期の諸様相を考察した。この時代の墓葬壁画屏風は少ないが、文献史料には、屏風絵の画家が頻繁に出てくる、また伝世品の屏風作品が多いこともこの時代の特徴である。画中画屏風と屏風の形態の変容は、この時代における屏風絵研究の二つの注意すべき点である。この時代、一部の屏風絵は通景図の衝立の形式だけでなく、押絵貼屏風の形式でも表現されるようになる。それについては、実用性よりも、観賞性が注目されている。言い換えれば、衝立形式の屏風は分体の貼り物の形式あるいは掛物の源ということができよう。画題は、山水図が多く、花鳥図と風俗図なども見られる。

第八章「東アジアにおける屏風絵の伝播と受容」において、東アジア諸国の古代屏風絵との密接な繋りについて考察した。この考察は古代の屏風絵美術がどのようにして中国大陸から朝鮮、日本へ伝播したかということを解明することにも役立つであろう。

終章「結論—中国における屏風絵の特質」では、上記の八章から導き出された中国における漢代から唐代の屏風絵の形式と材質技法、画題の変遷、地域性と時代性、絵画史上の意義などについて概観して、締め括りとした。

以上、本稿は序章と終章のほかに全八章で構成され研究を進める上での根本姿勢として次の四つの柱をもつ。

第一は、伝世史料が図像解釈の上で不可欠の前提となるということである。本稿の各章では、伝世文献に関する限り、主要な史料をほぼ網羅し、それの絵画史との関連を取り上げて、史料学の視点からうかがえる限り論じた。

第二は、各時代における考古学的出土品の情報に注目することである。宋元時代以前の屏風絵の資料は、出土品が主要な組成要素になっている。

第三は、伝世品の屏風絵は屏風絵研究上の重要な成分として、各時代の特徴をよく示しているということである。各時代における伝世品絵画に関してはすでに浩瀚な専著があり、画中画などに関しては、屏風絵史研究の格好のテーマと思われるため、筆者もまた史料の内容紹介も含めてやや詳細に私見を述べた。

第四は、東アジアにおける屏風絵の諸様相を解明することを表明したということである。

以上のように、本稿「中国における屏風絵の研究」は、図像学的方法によって、屏風絵の歴史的変容の様相を構造的に明らかにしようとしたものである。屏風絵が中国及び東アジアにおける絵画の重要な一分野として各地域に伝播し、変容された様相の解明に本稿が寄与することができればと思う。

（総文字数 4,003字）

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	王 元林
論 文 題 目	中国における屏風絵の研究

要　　旨

本論は、中国における屏風絵美術がいかに形成され、また変化したかを歴史的に辿り、屏風絵の歴史を貫く特質を考究したものである。図像学的な視点を導入することにより史的変遷の相において屏風絵美術を解析し、関連する文献史料をも加えて屏風絵の中国における諸相を明らかにする。さらにそれを軸に、屏風絵美術が中国大陸から朝鮮半島を経て、日本列島へ伝播する際の変容の様相も構造的に解明しようと試みた。

本論は大きく三部に分けられる。即ち序章、第一章から第八章までの論考、そして終章から構成されている。序章では中国における屏風絵研究の現状について、第二章から第八章では中国における屏風絵の実例について時代、形態、文献資料を分類して検討を行った。そして終章では本論の結論として中国及び東アジアの屏風絵の特質についてそれぞれまとめた。

次に各章の要旨を述べていく。

序章において中国における屏風絵研究の現状の問題及び本稿の論点などについてまとめた。具体的には、屏風絵の問題に関する先行研究史の概要、研究上の制約、本稿の資料典拠、研究方法、論点などについてである。

第一章「屏風の歴史についての考察」では、文献史料に基づいて中国における屏風の定義と性格、種類、機能およびその変遷の歴史について検討した。

第二章「屏風絵についての展開」においては、調度品としての中国における屏風絵の定義と性格、材質技法、種類と画題、図像構成、機能、発生・発展の歴史について検討した。

第三章「屏風絵の発生と形成期―漢時代及び漢以前」では、戦国から漢にかけての時代の屏風絵の特徴及び図像形成について詳しく検討した。文献史料を重視しながら画像石・画像磚、崖墓の彫刻、壁画上の図像について考察し、最終的には中国における早期の屏風絵の様相を明確にすることを目的とした。

第四章「屏風絵の発展期―魏晋南北朝時代」において、魏晋南北朝時代の史書、画史画論、題画詩などの文献史料における屏風絵や伝世作品などに注目し、木漆器屏風、石榻囲屏、壁画などについて考察した。特に、この時期の出土品を代表する屏風絵としてソグド人石榻囲屏と崔芬墓の屏風絵をめぐって詳細に論じた。

魏晋南北朝時代の屏風絵は前半では漢代の主題と様式を継承しつつ発展させ、後半では様々な画風を新たに生み出した隋唐時代の造形表現の祖型となった。南北朝時代の壁画墓屏風絵の特徴は前代に比べて人物の背景として拡大され、必要不可欠な背景となり、墓室壁画の中心となる明瞭な変化を遂げた点にある。また主な画題として山水画がしだいに発展してやがて独立した画題となった。これは隋唐時代の屏風絵画にきわめて大きな影響を与えた。他に北から南下し南北朝の統一を成し遂げた騎馬遊牧民の鮮卑族や、中央アジアから東アジアに至る交易網を作りあげて東西文明の交流の主役を演じたイラン系ソグド人の姿も描かれた。文化交流と美術史の視点から見ると、魏晋南北朝時代は中国が様々な人々と美しきものが交錯する十字路と化した激動の時代であったと言える。

主査記載 氏名・印	百 橋 明 穂

第五章「屏風絵の繁栄期―隋唐時代」では、隋唐期における屏風絵の歴史的・地域的な変遷について考察した。

この時期の史書、画史画論中の記述、画讃・題画詩・論画詩・画題・画跋・画記などから屏風絵に描かれる物語や屏風絵の歴史上の様相を理解することは比較的容易である。それに加えて、絹画屏風、紙画屏風、石棺床囲屏などの屏風作品、古墳壁画、石窟壁画などの画像資料をもとに検証した。とくに唐墓壁画屏風図の豊富な画題、内容は重要な資料となり、更にそのことは隋唐期における屏風絵の特徴の一つといえる。またこの時期の屏風の使用は一般化し、宮廷、官府の他に個人宅にまで設置された。名称も多様化され「屏」、「障」、「障子」と称され、漢詩、書、絵画などが共に表されるようにもなった。これによって屏風は家具としての機能だけでなく、当時の詩人や画家、書家による芸術の表現対象としての機能も有し、それが屏風の機能として最も重視された。

第六章「宋・遼・金・西夏・元時代の屏風絵」において、中晩唐時期の屏風絵の遺風に注目すると同時に、この時代の新画題と新技法などを補足し、遼・金・元時期における屏風絵の民族性についても考察した。この時代に入って、花鳥画と水墨山水画が主流となり、没骨法という新しい技法も発展した。絵画中における二次空間、すなわち画中画としての屏風と衝立の小景画の世界が展開した。

第七章「明清時代の屏風絵」では、中国における屏風絵の変容期の諸様相を考察した。この時代の墓葬壁画屏風は少ないが、文献史料には、屏風絵の画家が頻繁に出てくる、また伝世品の屏風作品が多いこともこの時代の特徴である。画中画屏風と屏風の形態の変容は、この時代における屏風絵研究の二つの注目すべき点である。

第八章「東アジアにおける屏風絵の伝播と受容」において、東アジア諸国の古代屏風絵との密接な繋りについて考察した。この考察は古代の屏風絵美術がどのようにして中国大陸から朝鮮、日本へ伝播したかということを解明することにも役立つであろう。

終章「結論―中国における屏風絵の特質」では、上記の八章から導き出された中国における屏風絵の形式と材質技法、画題の変遷、地域性と時代性、絵画史上の意義などについて、長い歴史の中で単なる調度品ではなく、各時代、各地域での固有の伝統を有しながら、相互に影響し合って、絵画空間を飾る特有な世界を繰り広げたことを実証した。

本論「中国における屏風絵の研究」は、図像学的方法によって、屏風絵の歴史的変容の様相を構造的に明らかにしようとしたものである。さらに屏風絵が東アジアにおける絵画の重要な一分野として各地域に伝播し、変容された様相の解明をも試みた。西は中央アジアから、中国を経て、東は日本にわたる広大な地域、また戦国、漢代から明清時代に至る長大な時代を扱ったため、やや取り上げる資料や作例が分散し、論旨を混乱させたきらいはあるが、その膨大な情報量と的確な分析は納得させるに十分である。なお資料編として付けられた膨大な量にわたる屏風絵作例一覧をはじめ、図版資料や関連文献資料などは今後の研究の基礎的なデータとして大いに斯界の研究に貢献することが期待される。

以上の審査結果をもって、本審査委員会は論文提出者王元林が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職　　名	氏　　名
主 査	教 授	百 橋 明 穂
副 査	教 授	森 紀 子
副 査	准 教 授	宮 下 規 久 朗